

—大動物臨床獣医学教育調査報告—

ヨーロッパ3大学における大動物臨床獣医学教育

石井三都夫<sup>†</sup> (帯広畜産大学臨床獣医学研究部門准教授)



1 はじめに

帯広畜産大学では産業動物獣医学教育拠点の形成を目指し、大動物総合臨床実習の充実を図っており、その取り組みは文部科学省「質の高い大学推進プログラム(教育GP)」(平成20年度)に採択された。我々、大動物臨床獣医学教育担当チームでは、教育プログラムの一層の充実を目的とした活動の一環として、海外の大学における大動物臨床獣医学教育の調査を行っているが、今回は2010年9月23日～10月4日にわたりドイツのハノーバー獣医科大学、オランダのユトレヒト大学獣医学部及びスイスのベルン大学の大動物臨床獣医学教育システムや施設を訪問調査したのでその概要について報告する。なお、今回視察研修を行った山田一孝教授、佐々木直樹准教授及び私の3名は、2008年、オーストラリアのクイーンズランド大学獣医学部を調査しており、オーストラリアに引き続き、今回はヨーロッパにおける大動物の臨床教育を比較検討する目的で同じメンバーで3カ国を調査した。

2 ドイツのハノーバー獣医科大学

まず訪れたのは、ドイツのハノーバー獣医科大学である。ハノーバーはドイツ北部首都ベルリンの西に位置し、周囲には山がなく広大な畑や農場が広がっている。周囲にはブレーメン、ハーメルンなど童話で有名な小さな歴史ある街が点在している。北ドイツは酪農や畜産の中心であり、ハノーバーのあるニーダーザクセン州や隣接するウエストファーレン州、ホルシュタイン州などは乗用馬の有名な産地でもある。ドイツには獣医学を教育する大学が5校あるが、ハノーバー獣医科大学が唯一の獣医学部のみで構成される単科大学であり、他の4校は総合大学の1学部として獣医学教育が行われている。獣医学教育のためのスタッフのみが大学を構成しており、

そのスタッフの数や施設すべてが獣医学教育のみのために用意されているわけで、そうした視点での日本の獣医学教育との比較は興味深い(図1)。

学生は毎年250名近く入学し5年の獣医学教育がおこなわれており全学で1,523名の学生が在籍している。56名(22名が臨床系)の教授、6名准教授の他に授業を担当するアカデミックスタッフ(獣医師の免許を持って学生を指導する)が204名、動物看護師、事務職などのスタッフ1,071名により獣医学教育がおこなわれている。日本との大きな違いは、アカデミックスタッフの数でありこれらの多くが、獣医学の研究を行いながら教育も担当しており、実習授業の大半をサポートしている。同様に大きな存在なのが動物看護師であり、各実習には必ず動物看護師が様々な仕事をこなしサポートしている。

ハノーバー獣医科大学には私自身15年前に1カ月ほど滞在した経験がある。その当時すでに大学の臨床教育では、内科学、外科学といった教科ごとではなく牛クリニック、馬クリニック、小動物クリニックなどに分けられていた。今回も牛クリニックと馬クリニックを訪れたが、いずれのクリニックも多数の患者が来院し、多数の



図1 ハノーバー獣医科大学の牛クリニック  
入口の壁には牛の頭のモニュメントが飾られている。

<sup>†</sup> 連絡責任者：石井三都夫 (帯広畜産大学臨床獣医学研究部門)

〒080-8555 帯広市稲田町西2線11番地 ☎・FAX 0155-49-5377 E-mail : mishii@obihiro.ac.jp



図2 牛クリニックの牛のモニュメントの前で  
左からM Kaske教授, 石井, 山田, 佐々木.

教員と獣医師、動物看護師らによってしっかりと臨床が行われ、その中で臨床教育がおこなわれていた。牛クリニックだけでも5名の教授をはじめ20名のアカデミックスタッフ（獣医師）および同じくらいの人数の動物看護師などのスタッフにより診療及び教育が行われている。年間1,600頭の新患牛が入院する。そのうち1/3が第四変位、1/3が蹄病、残りの1/3が感染症やそのほかの疾病で入院する。毎日5頭前後が入退院し40頭の実習用家畜も含めて100～110頭の家畜が大学内で飼われている。動物看護師の仕事は多岐にわたり、入院畜の給餌、搾乳、牛舎の清掃などはもちろん、手術の準備、牛体の剃毛や洗浄、術後の後片付けまで行う。教員である獣医師は実際の治療や手術のみを担当し、少人数の学生を指導しながら診療する。すべてを大学教員や臨床獣医師が行っている日本とは大きな違いである。臨床教育は2年生から5年生までの4学年にわたり授業が行われる。学生は各学年において牛の臨床に触れることができ、少しずつ発展的に牛に触れる機会が増えていく。最終学年の5年生では、学内外を問わず自由に実習を組み立てる期間である。学内でもすべてのクリニックで実習を受け付けており、その期間はクリニックにより多少異なる（牛クリニックでは10週間）。学内クリニックでの実習は必須ではなく、あくまで選択肢の一つである。唯一、すべての学生が必ず参加しなければならない実習がと殺場での4週間の実習だが、これは学内組織ではない。通常学生は、進路に従い学内での実習は1つか2つか参加せず、ほとんどの時間を学外の開業医や他国の大学での実習にあてるといふ。牛クリニックでは2人に1頭の牛があてがわれ、2日に1回の直腸検査や超音波検査の実習が繰り返されている。手術は毎日のように学生3～4人が参加し、教員の監督のもとに行われている。5年間の教育期間のあと、半年間の試験期間（実地と理論両

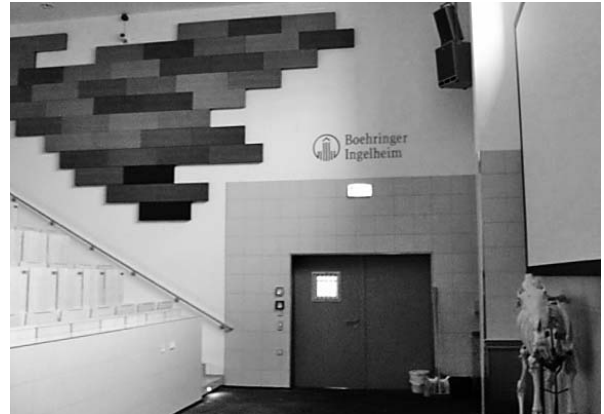


図3 馬クリニックの実習講義室  
入口上には、薬品会社名がロゴとともに描かれている。

方、計9つ）があり、それにパスすれば卒業となる。そのため、獣医学教育カリキュラムは5年ではなく正確には5年半となる。この試験は獣医師の資格を得るための国家試験ではなく、あくまで各セメスター後に行われる科目ごとの試験の延長である。最後の半年で受ける試験は家禽疾病、獣医法規、病理組織学、そして内科、外科、繁殖の実地試験（1つの動物を選択できる）などで、日本のように最後にまとめて総合的な理論試験をすることはしないようだ。全ての試験にパスして単位を取った時点で獣医師資格がもらえる。95%の学生がこの獣医師資格試験にパスするとのことであった。その後2年間の間に60%以上の卒業生がDVM（Doctor of Veterinary Medicine）を取得する。その後、PhD（Doctor of Philosophy）を取得するのはごく一部に限られている。卒業後の就職先については細かな情報は得られなかったが、卒業生の1/3は大動物関係に携わっており、その多くは臨床家として開業しているが、大動物と小動物を両方見ている開業獣医師が多いとのことであった（図2）。

馬クリニックは、本キャンパスから2km程離れた広い大学の敷地内に移転し、運用を始めたばかりであった。小動物病院と併設され、すべての病院や研究棟、厩舎などが新しく建築された。乗用馬の生産地の中心を担う獣医科大学にふさわしいハードとソフトを兼ね備えている。実習講義用の階段教室では、学生の前に馬を連れてきて実際に見せながら講義することができる。入口に薬品会社のロゴ入り文字が掲げられているのが印象的だった。それなりの寄付をいただいて作られているのが明確である（図3）。トレッドミル装置、馬用CT装置、馬用MRI、3つの無菌手術室に続く覚醒室など、施設は世界のトップレベルである。今回は日程の余裕がなく施設の見学にとどまったが、機会があればその運用をじっくりと見学したかった。世界に羽ばたく馬の研究者が今後



図4 馬クリニックの馬の頭のモニュメントの前で  
左から石井, 佐々木, M Scholze 博士, H Zeimen 教授, 山田.

も輩出されるであろうことは言うまでもない (図4)。

馬クリニックにおいて、学生は1年時より希望すれば午後の診療を自由に見学することができる。各学年において見学者は絶えないようであるが、時期によりその人数は大きく増減するとのことであった。学生自身の獣医学教育を通しての大動物診療に対しての継続的なモチベーションの高揚に役立っている。こうした自主的な見学は、日本においてもすぐにでも取り入れることができると思われたが、各大学が学生に対してこうした臨床現場を提供することができない現実が最大の問題である。現時点では、NOSAIにおける臨床実習をより早い時期から継続的に経験させる方策が現実的であろうか。

### 3 オランダのユトレヒト大学獣医学部

ドイツ、ハノーバーから北へ列車に乗り4時間ほどで第2の目的地オランダのユトレヒトに着いた。北ドイツからオランダに向かった車窓から見る景色は、すべてが平坦で移動中に山は確認できなかった。オランダに入ってから放牧される牛が増えていることと、広がる牧草地に点在する集落の家々が、ドイツに比べ、やや白を基調とした華やいだ感じになったのが印象的だった。ユトレヒトはオランダの国土のほぼ中央に位置するオランダ第4の都市である。宗教の中心として栄え、現在は商業都市であるが大学都市としても名高い。ユトレヒト駅近くにはドム教会の大聖堂があり、鐘楼であるドムタワーがランドマークとしてそびえている。教会を中心に旧市



図5 ユトレヒト大学講義風景  
225名が階段教室にて授業を受ける。学生の85%が女性である。

街が広がっており、運河沿いはライトアップされレストランや商店が軒を並べている、とても落ち着いたの美しい小都市である。

ユトレヒト大学は約3万人の学生が学ぶ国立の総合大学で、オランダ国内では唯一の獣医学部を持つ大学である。大学全体で7,500人のスタッフで運営されており、1年間の総予算額は850億円を超える。獣医学部は1821年に創設された。オランダでの獣医学教育はこの大学のみで行われていることから、国内では獣医学教育に対しての比較対象がなく、獣医学大学の連携はできない代わりに、医学系大学との情報交換が盛んに行われ、世界的視野を持った高いレベルの獣医学教育が古くから行われている。1973年にアメリカ獣医学会 (AVMA) 及びカナダ獣医学会 (CVMA) よりヨーロッパでは初めての獣医学教育に関する国際認証を受け、ユトレヒト大学獣医学部卒業の学生はアメリカ及びカナダ国内においても獣医師として働くことが認められている。現在、世界でトップ5の獣医学教育として評価されている (上海レーティング)。

約1,700名の獣医学部学生が学んでいるが、その学生の85%は女性である (図5)。この傾向は、今回視察した他の2大学においても同様であった。年225名の獣医学部生に対し獣医学教育スタッフは総勢1,100名ほどであり、その40% (440名) がアカデミックスタッフといわれる獣医師の免許を有した指導陣である。その世界的に認められた高いレベルの獣医学教育もその後も幾度も更新されており、2001年より新しいカリキュラムで行われてきた6年間の獣医学教育が、2007年に再度大きく改変され、3年間のバチェラー (学部) 教育と3年間のマスター教育というシステムに変更となった。この変更の大きな目的は、獣医学教育をより専門的に高いレベルで行うという点にあり、獣医学教育の中に研究者的な



図6 バイオハザードに設置された長靴  
ここで大学で用意されたつなぎと長靴を着用する。



図7 ユトレヒト大学における手術実習  
中央で振り返っているのが教員，右は動物看護師，  
他2名は学生。

視点が求められるように改変されている。その後の4年間のPhDコースにより、より多くの研究者の輩出を目指している。他の国の獣医学部卒業生に対しても18カ月間のマスタープログラムを用意し、PhDコースに入る前に研究者としてのトレーニングをつめるようなカリキュラムが用意されている。本年が、2007年に始まった新カリキュラムにおいてバチェラー（学部教育）が終了し、マスターコース1年目の学生と旧カリキュラムの5年生以降の臨床ローテーション教育とが重なり、指導者の方々もやや混乱しているように思えたが、教育システムについて説明してくれたそれぞれの教員が、より高い教育レベルへ意欲的に取り組んでいる姿勢が明確に表れていたのが印象的だった。オランダ国内には、約4,500人の獣医師がおり、約1,300の診療施設において約3,300人の臨床獣医師が働いている。その中で、45%が女性とのことであるが、近い将来その男女比が逆転するのは明白である。

ユトレヒト大学の家畜病院は2001年に流行した口蹄疫により牛の移動ができなくなり大学の病院を閉鎖して以来、大学にてファームアニマル（牛羊豚）の診療は行っていない。そのころから、理念としても「病気」に対する教育や研究から「健康」に関する教育や研究にシフトされ、教育と研究報告とを両立させている。大学として臨床を直接行わない代わりに実習のための妊娠牛を年間40頭、その他にも健康や病気の子牛など相当数を購入している。昨年新しく建てられたファームアニマルクリニックを見学した。実習スペースに入る前に、バイオハザードが設けられており、たくさんの長靴とつなぎが用意されており学生や見学者は用意された服や長靴に着替えた後、長靴を洗浄消毒した後に実習スペースに入ることが義務付けられていた。農場で汚れたつなぎや長靴のまま他の共有スペースに行くことはなく、他から

農場内に病原菌などを持ち込むこともない。つなぎなどは汚れた時点でクリーニングされ、サイズごとに整理されている（図6）。

牛の飼養スペースでは、タイストールやフリーストールなど一般的な農場での飼養スタイルを学内において学生に実習用として提供できるようになっていた。妊娠牛で購入された牛は様々な実習に提供され、いくつかの手術を受け、搾乳され実習期間中ははずかではあるが牛乳の出荷もしているという。これらの実習用の牛は毎年更新される。それとは別に、実習農場があり60頭の搾乳牛が搾乳実習や分娩管理実習などのために飼養されている。フリーバンの分娩房は使いやすく、24時間ビデオ監視され、担当する学生が寝泊りをしながら分娩監視を行っている。搾乳は教員の指導のもと学生により交代で行われていた。真冬でも最低でも2週間に1回以上放牧に出すなど、様々な法律が科せられたオーガニックファームの認定を受けており農場としても地域の見本となる姿勢が表れている。

牛のクリニカルローテーションにおける臨床実習は10人以下の小グループにより行われていた。手術実習は1名の動物看護師、1名の教員と2人の学生により行われている（図7）。分娩管理における実習の部屋は広く、冷凍保存されているたくさんの子牛を数日前から室温に戻し実習に提供していた。骨盤骨を固定したものや、同様に金属で作られた実習器具を用い、子宮にみたてた袋の中に胎子を入れて、難産における失位整復の実習に用いる。子宮捻転の実習に用いる妊娠子宮の模型も手作りで制作されていた。こうした、実習道具一つ一つにも高い獣医学教育を提供してきた歴史と工夫が感じ取れた（図8）。

大学内には豚の実習農場もあり、学生教育に提供されている。一般的な豚飼育農家を再現した実習農場におい



図8 子宮捻転の実習のための模型  
授業では子宮内に詰め物をして使用する。

て、豚の繁殖、生産が行われていた。ここでは、豚の分娩から育成交配まですべてを体験することができる。ここでも、見学時には、見学用のつなぎを着用し用意された長靴に履き替えて、手指の消毒を行った後に入場し、各施設には長靴消毒槽が設けられていた。学生がここに実習の出入りをするだけでも、バイオハザードに対する意識付けが施され、豚の生産に関する実践が教育されている。

馬クリニックは臨床を中心に行われており、毎日3～4頭の馬が入退院し年間900～1,000頭の馬が入院する。平均でも10頭多い日には30～40頭の患者を診療するという。6名の教授及び准教授の他20名の専門医、30名の獣医師の免許を持ったレジデントレーナーにより診療及び教育が行われている。朝晩のラウンドにより入院畜の治療や報告が行われ、当直の獣医師が夜間の急患のために宿直している。クリニックを閉鎖したファームアニマルとは対照的に臨床症例を用いて臨床教育が行われており、高いレベルの獣医療が実際に飼い主に提供されている。馬クリニックの内部は広々とした空間に富み、見学した施設すべてが素晴らしく、海外から高い評価を得られていることに納得する。馬クリニックでは、新しく始まったマスターコースにおいて馬コース以外のファームアニマルや小動物のマスターコースを選択した学生に対して5週間のトレーニングコースを提供する。25～30名に限定した馬コースを選択した学生に対しては28週間のトレーニングを予定している。このような教育システムは他のファームアニマルや小動物コースを選択した学生においても同様であり、大学卒業時にはマスターコース別に、より専門的な教育と研究に対する基本理念が提供されることになる。



図9 ベルン大学キャンパス内で  
左から、佐々木、山田、A Steiner教授、  
M Dickomeit博士、R Bruckmaier教授、石井。

#### 4 スイスのベルン大学獣医学部

最後の目的地スイスへの移動もヨーロッパ国際列車(EC)を利用した。今回は30日間に5回まで利用することができる特別チケットを利用したが近隣の国への移動には安価で便利である。フランクフルトで乗り継ぎ北へ向かい、ドイツとスイスの国境付近は丘が広がり、景色が一変する。一帯に広がっていた牧草地は、穀倉地帯から背の低いフルーツ畑に変わり、森林も広がる。トンネルを抜けるとそこはスイス。初めて訪れたスイスであったが、目的地のベルン市周辺には高い山が見られず、丘陵地帯が広がっており、放牧されている牛や羊が車窓からも、たくさん見ることができた。ドイツやオランダに比べると1軒当たりの飼養頭数も少なく、スイス原産のブラウンスイスやシメンタールなどの薄茶色の牛が目立った。

今回訪れたベルン大学はベルン市内にあり、ベルン駅から徒歩で移動可能な距離にある。ベルン大学も総合大学で、多くの学部が市街地近くの大学地域に点在している。スイスの首都ベルンの旧市街は、ユネスコの世界遺産にも登録されている美しい街である。石造りのアーケードが約6kmにわたって連なり、花に彩られた個性的な噴水があちこちに点在する。市街地にはトラムと呼ばれる路面電車(バス)が縦横に走り市民や観光客の足となっている。旧市街を取り囲むように流れるアーレ川は流れも速く水量も多く、青く透き通っていた。スイス国内の水道水は衛生的で飲用に適しているといわれており、実際に美味しかった。スイスには家畜の糞尿による河川の汚染は今のところ問題視されていなかった。

スイス国内には160万頭の牛が飼養されており、そのうち60万頭が搾乳牛である。20頭程度の牛を飼養する小規模な農家を中心で最も大きい農家でも搾乳牛150頭程度の規模である。しかし近年は、6万戸の畜産農家の



図10 ベルン大学の通信教育用講義室  
各テーブルには質問用のボタンが設置されている。

うち毎年1,000戸ずつ減少し、その分少しずつ大型化が進んでいるという。乳価は約60円程度に抑えられているようで、ここでも、酪農家はコスト削減が求められている。スイス国内には約2,700人の獣医師がおり、約半数が小動物、大小どちらも診ている獣医師が3割、大動物専門で働くのは1割程度であるという。

スイス国内では7年前までベルン大学とチューリッヒ大学の2つの大学においてそれぞれ獣医学教育が行われていた。現在は2つの大学が合併し、ほぼ同じカリキュラムでそれぞれの大学のキャンパスにおいてスイス国内で唯一の獣医学教育を行うベツトスイス（スイス獣医）学部として運営されている。2大学は120km離れており、合併前には様々な問題があり、多くの論議を重ねて現在の形で運営されるようになっていく。2大学の合併協議の入り口において3つの選択肢があった。①1校を閉鎖する。②2校を閉鎖して中間に新たな大学を建設する。③両校を生かし、2校で同じカリキュラムを共有する。現在、帯広畜産大学では北海道大学との連携協議が進み、2012年より同じカリキュラムで獣医学教育を行うと取り組んでいる。現時点では、スイスの2大学が選択した③の選択肢において連携を模索中であるが、今後の両大学における連携協議の大きな参考になると期待してベルン大学を訪れた（図9）。

ベルン大学とチューリッヒ大学の獣医学部は、ややチューリッヒ大学の方が運営経費、規模、学生数とも若干多いが、ほぼ同じ程度の規模である。5年間の獣医学教育が行われており、3年間のバachelor（学部教育）と2年間のmaster教育に分かれている。ベルン大学では、約80名の入学生を受け入れているが、毎年行われる進級試験が大変厳しくmaster（4年生）に進むのは55人に絞られる。ユトレヒト大学のmasterコースと同様に最終学年の5年次において、より専門性を高めるための



図11 スイスにおけるトップブリーダーの牛群  
赤白のホルスタイン種、反対側には白黒のホルスタイン種が並んでいる。

選択性がとられており、小動物、ファームアニマル、馬、公衆衛生、感染症、生物医学研究の6つの専門トラックを選択できる。小動物、ファームアニマル、馬などの臨床科目において、4週間の他のトラックにおける実習の上に自分の選択したトラックにおいて11週間の専門的な実習が行われている。それぞれの臨床研究室においては7～9人の小グループに分けられ臨床実習が行われている。95%の卒業生が1年のうちに1編の論文報告によりDVMを取得する。その後、10%程度が3年間で最低2編、平均では3～4編の論文を書き上げてPhDを取得する。その後には、6年間をかけて将来教員として働くための資格を取得するコースが用意されている。ベルン大学のみでも、臨床科目のみで10名の教授及び准教授、6名の専門医の講師を中心に73名の獣医師の資格を持ったアカデミックスタッフがおり、60名のテクニカルワーカー（動物看護師）とともに臨床獣医学教育が行われている。獣医基礎系の教授は16名、スタッフは35～40名程度いる。2大学での指導はほぼ同程度で行われていることから、いかに臨床教育が充実しているかが分かる。

約30%の授業が、同じ時間に通信教育システムを利用して、それぞれの大学のキャンパスにいながら同時に受講することができる。それぞれの大学において60名以上の学生が同時に受講し、実際に授業を担当する教授がいない大学においては衛星画面を通してその様子が送られる。各テーブルにはボタンが設置され質問のある学生はタイムリーに質問することができる（図10）。

それぞれの大学において各臨床クリニックが活発に機能して高度な臨床教育と獣医療を提供している。今回はベルン大学のみでの視察であったが、はっきりと、その様子を確認することができた。ファームアニマルクリニック（牛豚クリニック）においては、二次診療を基本とす

る年間1,500～1,600頭の入院家畜があり、1日当たり4～5頭の入退院が繰り返されている。視察中にも第4胃変位の手術牛を見ることができたが、術後平均1週間の入院期間の経費も含め第4胃変位の手術にかかわる経費は約5万円だが、日本のように第4胃変位の頭数は多くないようであり、頭数が少ないため発症牛に対しては手術が行われている。実習畜であったが19歳のシメンター牛が入院していた。スイスのトップブリーダーの農場を見学する機会があったが、平均乳量は9,000kg程度であるが経産牛の平均寿命は5産以上とのことで、疾病の罹患率も低い。一般に牛の寿命も日本に比べ長く、しっかりとした個体診療も行われているようであった。夏の放牧期に比較し、冬の舎飼い期には、病畜も増え診療頭数が増加する傾向がある（図11）。

馬クリニックは、二次診療が基本で年間1,800頭の入院治療を行っており、全身麻酔が必要な症例については大学が対応している。スイスには10万頭の馬がおり、国土面積を考えると日本よりはるかに馬の密度も濃い。多くはスイスブリードといわれる山岳輸送を目的とされた重系の品種である。日本の重挽馬に比較して小型ではあるが、サラブレッドなどの軽種馬に比較すると明らかに横幅があった。ベルン大学の馬クリニックには、5人の教授及び准教授の他、15名のアカデミックスタッフがおり、常時4～5名の学生とともに毎朝のラウンドを行っている。5頭の実習用の馬が飼養されており40頭の入院既舎が用意されている。馬の繁殖については、大学から車で30分程度の距離に国立の種馬所があり、繁殖診療のほとんどが行われている。種馬所では、専属の獣医師により、学生達が直腸検査などの実習を受けているとのことであった。チューリッヒ大学からも同様に学生に対しての実習が国立種馬所において行われている。

ベツトスイス学部がある2大学は、合併前よりほぼ同じような規模で、それぞれのクリニックも同じように充実して機能している。距離も120kmとやや近く、高速道路が整備されているため1時間余りで行き来できる。それぞれの大学を行き来しながらの授業は、あまりないとのことであったが、会議は頻繁に行われるという。日本において連携協議中の大学間には、距離の問題があり、各大学の格差をどう是正し、特色をどう生かすか。今後、相当の協議を重ねて、連携協力することによるスケールメリットを最大限に生かす方策を模索しなければならないであろう。

## 5 おわりに

今回、ヨーロッパ3カ国をめぐる獣医学教育について大動物臨床教育を中心に視察することができた。前回視

察したオーストラリアと同様に、日本における大動物臨床教育が、いかに海外の大動物臨床教育とかけ離れているか実感することができた。近年、鳥インフルエンザや口蹄疫などが発生し、国際的な観点からその対策や防疫を求められている。その中で、現在の日本の獣医学教育レベルでは、日本の獣医師が国際的に認められず、孤立する可能性が懸念されている。今回の視察においても、あらためて、日本の獣医学教育、特に、大動物臨床教育は、海外のレベルに対して不足していることが明白となった。今回視察した3大学すべてにおいて、大動物臨床教育は、より実践的であり、卒業時の学生の習熟度は大きな違いがあることが明らかであった。施設面においての違いも大きかったが、最もかけ離れている違いは、臨床教育に携わる教員であるアカデミックスタッフと動物看護師などのサポートスタッフの数である。今回訪れた3カ国において、ドイツでは5つの獣医学大学を有しているが、他の2カ国はそれぞれが1つの大学であり、一方で、日本においては私立大学を含めて16もの獣医学教育を行う大学がある。日本の獣医科系大学の数の多さだけが際立っている。今回訪れた3カ所のそれぞれの獣医科系大学の学生数は、日本の旧国立大学に比較して多く、3～4倍を有している。人口比較では、日本の1億2,700万人に対し、ドイツが8,000万人、オランダは1,700万人、スイスは750万人程度である。毎年卒業する獣医学大学の学生数に対する人口比率では、大きな差はないようにも思える。こうした背景から、単純にその獣医学教育自体を比較することはできないが、仮に日本の獣医科系大学が再編統合される場合には、その教授あるいは准教授の数自体では、国際的にも匹敵する数になる可能性はある。しかしながら、圧倒的に違うのが、臨床系教員の数であり、特に、アカデミックスタッフといわれる獣医師の免許を持った臨床教育スタッフおよび動物看護師を中心としたサポートスタッフの数のケタ外れた相違である。こうした問題をクリアしない限り、日本における大動物臨床獣医学の教育レベルを向上させる目的での大学再編には、大変な困難が伴うことを覚悟しなければならない。

今回の視察研修において多忙の中協力いただいたドイツ、ハノーバー獣医科大学のH Ziemer教授、M Kaske教授、M Schulze博士、オランダ、ユトレヒト大学のP Vos教授、W Kremer教授、R Barneveld教授、H Maazen博士、F Knapen教授、H Luts博士、J Gooijer先生、スイス、ベルン大学のA Steiner教授、R Bruckmaier教授、H Meier先生、M Dickomeit博士、Govgas先生に心よりお礼申し上げたい。なお、本調査は、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」の一部として実施された。